

川端康成と『伊豆の踊子』

— 問題点と疑問点の解明を中心に —

任 健

- はじめに 一川端文学との出会い／研究の目的—
- 第1章 創作動機への探求
- ア： 精神回復説
- イ： 過去への総決算説
- ウ： 作品原体験重視説
- 第2章 「踊子」の救済と浄化による「孤児根性」からの脱却
- 第3章 『伊豆の踊子』の醜たるものについて
- 第4章 『伊豆の踊子』の非現実性について
- 1 「伊豆の踊子」は姿を変えた伊藤初代か
- 2 「伊豆半島」は虚構の舞台か
- おわりに

はじめに一川端文学との出会い／研究の目的—

川端康成の初期の名作『伊豆の踊子』を初めて読んだのは多分大学四年生の頃であつたろう。四年生用の教材には、『伊豆の踊子』の他に、志賀直哉の『城の崎にて』、芥川龍之介の『鼻』、太宰治の『富嶽百景』等、日本文学史上における有名な作家の代表作も、数多く収録されている。川端文学は難解だというイメージと違って、『伊豆の踊子』はストーリーもシンプルだし、用語も簡単だし、文章も流麗なので、読んで見ると、リズムもよいし、音もよい。そして、その余韻がしばらく身の回りに響いていて、な

かなか頭の中から消え去り難いような気がする。『伊豆の踊子』はなぜ読者にこんなに強い共鳴を呼び起こしたのか、について、ある川端文学研究者は、『伊豆の踊子』に多く出る名詞止めの文章がテンションを高める効果を持っているからだ、と指摘したが、私はまだそこまで考えてはいない。しかし作品を読む限り、真夏に冷たい水を飲んだ後の一種のすがすがしさを覚えることだけは分かっていた。そればかりではない。作中の「私」と踊子との淡い恋心とその素直な触れ合い、そして実を結ぶはずのない愛のかなさにすごく感動し、涙がこぼれそうにもなった。少年少女の純粋な愛を描いたこの作品の主題が、清純な愛を求める年若い読者の希求と一致するからこそ、『伊豆の踊子』は世界的な、永遠のベストセラーになったのであろう。

四年生に上がるまでは、私は日本文学に対してまったくの門外漢であった。日本文学、特に日本近代文学に親しくなり、さらに日本文学の研究と教育を目指すようになったのは、『伊豆の踊子』の魅力、川端康成の質と才能に強く惹き付けられたからである。青春時代での良い本とのめぐりあい、どれだけ人生に影響するかが分かった。

森本穫氏は「文学教材としての『伊豆の踊子』」（川端康成研究叢書1「傷魂の青春『十六歳の日記』『伊豆の踊子』」、川端文学研究会編、教育出版センター、昭和51年8月）で、『伊豆の踊子』が日本の多くの教科書に採用されているのは、この作品が普遍的な青春文学の大正期の代表作であり、「これから青春を生きようとする高校生に、より鋭くより豊かに個々の青春を生きるための恰好の素材」であるからだ、と紹介している。中国でも、川端康成はノーベル文学賞に輝いたアジアの作家として大いに注目され、『伊豆の踊子』は彼の代表作として多くの大学の日本近代文学の教材に取り上げられて、たくさんの若い読者を魅了して来た。川端の数多くの作品から、『伊豆の踊子』だけが教科書に選ばれたのは、素朴で清純な『伊豆の踊子』が学生に与えるにふさわしい作品だと考えられているためであろう。しか

し他方、作品を教材として扱う時、作中のある部分をカットしなければならない。美しい『伊豆の踊子』の中には、果たして学生に見せてはならない、汚い部分があるのだろうか。『孤児』は私の全作品、全生涯の底を通して流れる。⁽¹⁾と川端は語ったことがある。だが、作品『伊豆の踊子』では、『孤児』というテーマがどのように取り扱われているのか、また、『伊豆の踊子』は、彼の伊豆旅行体験に基づいて書かれたはずなのに、作品に描かれた人物と場所は、どうも実生活から切り離されているように読者に感じられた等々、私は、主人公の清純な愛に感動した半面、数々の問題点と疑問点も感じた。教師としての私には、これらの問題点と疑問点を解明する義務があると思うから、鋭意に研究に努力してきた。本論は、その研究の成果の一部である。

第1章 創作動機への探求

川端康成は大正7年の秋、伊豆の旅に出て踊子一行に出会った。その体験に基づいて、翌年の大正8年に「ちよ」を書いて、この作品を旧制第一高等学校（現東京大学）の「校友会雑誌」に発表した。3年後の大正11年、彼は湯ヶ島温泉で未定稿の『湯ヶ島での思ひ出』を書いた。さらに『湯ヶ島での思ひ出』の107枚の原稿から、伊豆旅行の回想部分だけを切り離し、これを作品『伊豆の踊子』に書き直した。こうして出来上がった『伊豆の踊子』は、『伊豆の踊子』と『続伊豆の踊子』として、新感覚派の機関紙『文芸時代』の大正15年1月号と2月号に連載された。伊豆の旅から『湯ヶ島での思ひ出』の執筆を経て、『伊豆の踊子』の発表に至るまで、実に8年間もの歳月を経たが、すでに記憶も薄れかけたはずの踊子を、川端は改めて思い出し、彼女をテーマにしてこの作品を書いたのである。この作品に対する彼のこのような思い入れには何がはたらいていたのだろうか。これを理解するためには彼の創作動機が問われねばならない。創作動機を正しく把握できれば、作品への理解が容易くなるからである。とりわけ、作家

の実体験に基づいて書かれた『伊豆の踊子』のような作品を味読する際には、創作動機への探求はおろそかにできるものではない。『伊豆の踊子』に関する研究論文では、多かれ少なかれ『伊豆の踊子』の創作動機について触れたところがある。そこで、まずその代表的なものを紹介しておきたい。

ア、精神回復説⁽²⁾

長谷川泉氏は「『伊豆の踊子』の創作動機」(川端康成研究叢書1「傷魂の青春『十六歳の日記』『伊豆の踊子』」, 川端文学研究会編, 教育出版センター, 昭和51年8月)の中で、伊藤初代との恋愛に破れた傷痕からの精神的立直りが創作動機であると述べている。長谷川氏は、『湯ヶ島での思ひ出』執筆時の川端の気持ちの重要性を強調した。そして「『伊豆の踊子』は、川端康成の伊藤初代との恋愛に破れた傷痕に結晶しているのであるから、湯ヶ島温泉でその心の傷を洗った『湯ヶ島での思ひ出』が重要である」と述べている。さらに長谷川氏は、『湯ヶ島での思ひ出』について、川端自身が語った「傷心がこれを書かせる動機となったのではあったらう。」(川端康成「『伊豆の踊子』の作者」『風景』昭和42年5月～43年11月)という言葉引用し、説の正当性を裏付けた。川嶋至氏、森本穫氏、山本健吉氏、林武志氏、岩田光子氏なども、いずれも、これに近い見解を表明している。

イ、過去への総決算説⁽²⁾

藤森重紀氏は「『伊豆の踊子』の構造—回想物語の中の実在人物—」(川端康成研究叢書1「傷魂の青春『十六歳の日記』『伊豆の踊子』」, 川端文学研究会編, 教育出版センター, 昭和51年8月)で、長谷川泉説とは違って、『伊豆の踊子』執筆の当時の大正15年の川端の様子、殊に新しい恋人——ヒデにめぐりあった時の川端の心境に力点を置いて、「過去への総決算説」を提出した。そこで藤森氏は、ヒデ(現未亡人)との結婚に臨み、「『伊豆の踊子』制作は失恋の女性に関わる憧憬的言辞を一括し、総決算しておき

たいとの意図のもとに書かれた、そういう観測である。」と論じた。

ウ、作品原体験重視説⁽²⁾

武田勝彦氏は、長谷川氏と同じく、川端作「『伊豆の踊子』の作者」から創作動機を考えた。が、長谷川氏とは違ったところに目を向けた。武田氏は「川端文学における『伊豆の踊子』の位置」(川端康成研究叢書1「傷魂の青春『十六歳の日記』『伊豆の踊子』」, 川端文学研究会編, 教育出版センター, 昭和51年8月)で、まず、「『伊豆の踊子』の場合は、旅芸人とのめぐりあひが、私にこれを産ませてくれた」という「『伊豆の踊子』の作者」の文を引用して、そして、「この感懐には創作の契機とインスピレーションがよく織り込まれている」と指摘し、8年前の、踊子に出会った伊豆の旅への回想が創作動機であった、という「作品原体験重視説」を提出した。因みに平山三男氏の見解は、武田氏と同様、つまり、作品背景は無視してもよい、我々が感動するのはあくまで『伊豆の踊子』だというものである。

藤森氏のものを見る独特な視角、武田氏の仮説の率直さと大胆さを評価したい。しかし、『伊豆の踊子』は事実に近い小説であり、そして、この事実に伊豆での経験以外の事も含まれていることを忘れてはならない。川端は、旧制高校生の頃によく通ったカフェ・エランで給仕をしていた初代という娘と知り合い、恋に落ちた。大正10年10月8日に、岐阜で彼女と婚約し、さらに岩手県の岩谷堂を訪れ、実父から結婚を許された。ところが、1ヶ月も経たないうちに、『非常』の手紙を受け取り、この話は、あっけなく、わけもわからないままに破談となった。「私の心の波は強かった。幾年も尾を曳いた。」⁽³⁾という川端氏の言葉は、この破談による心の傷の深さを伝えている。そこで「人の不可解な裏切りに遭って潰えようとする心」⁽⁴⁾を癒すために、「去年の暮(大正10年のこと——筆者)にも私は湯ヶ島に逃れて来たのであった。」これは、婚約から湯ヶ島に逃れるまでの経緯である。

『伊豆の踊子』の創作動機を考えながら、筆者は、あまりにも多く『湯ヶ島での思ひ出』の書かれた大正11年の川端の実生活に関してきたように思われる。しかし、これは余計なことではない。『伊豆の踊子』の原型は『湯ヶ島での思ひ出』であり、『湯ヶ島での思ひ出』は、初代との恋愛事件を無視しては生まれなかったはずのものであったから、私は『湯ヶ島での思ひ出』の書かれた時点に立って、『伊豆の踊子』の創作動機を考えるべきではないかと考える。その時点で考えた時、初代との破談による川端の傷手の深さが大きく浮かび上がってくる。川端は『湯ヶ島での思ひ出』の執筆と『伊豆の踊子』の発表で、その時受けた傷手の回復を必死に希ったのではなかろうか。

第2章「踊子」の救済と浄化による「孤児根性」からの脱却

『伊豆の踊子』の素材となった伊豆の旅について川端自身が述べたものがある。

私が二十歳の時、旅芸人と五六日の旅をして、純情になり、別れて涙を流したのも、あながち踊子に対する感傷ばかりではなかった。

(中略)

旅情と、また大阪平野の田舎しか知らない私に、伊豆の田舎の風光とが、私の心をゆるめた。そして踊子に会った。いはゆる旅芸人根性などとは似もつかない、野の匂ひがある正直な好意を私は見せられた。(中略) 今から思へば、夢のやうである。幼いことである。⁽⁵⁾

この文は伊豆の旅の意義を理解するのに極めて重要な部分である。川端の伊豆の旅は、現代人がよくやる単なる土地の風景や風土を楽しむ旅、或いは、疲れとストレスを鎮める旅とは違い、人間の魂に突き当たるほどの旅なのである。「今から思へば、夢のやうである。」という文の中には、彼

も予測しなかった、踊子の救済と浄化、「孤児根性」からの脱却に対する一種の喜びと感動が秘められている。旅の動機に関しては

二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでいると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪え切れないで伊豆の旅に出て来ているのだった。

(テキストP. 34)

と作中で述べられている。また、『少年』（『人間』5——昭和24年3月号、断続連載）の14にも

私の幼年時代が残した精神の病患ばかりが気になって、自分を憐れむ念と自分を厭ふ念とに堪へられなかった。それで伊豆へ行った。

と明らかにされている。

天城峠から下田への旅の途中、踊子一行の本当の姿が分かり、踊子一行とのさりげない交流が深まってゆくにつれ、「私」も次第に素直になっているのである。雨宿りの茶店で、踊子の親切に対して感謝の言葉も出なかった「私」は、東京へ戻る船中では、遠慮なく少年のくれたすしを食べたり、少年の学生マントにもぐり込んだりして、人の前ではあっても平気に涙を出委せに泣いている「私」になってしまった。

峠の北口の茶店で踊子と三度目に会った時、「私」は高等学校の学生でありながら、座布団を裏返しに出してくれた踊子にお礼も言えなかった。「幼少から、世間並みではなく、不幸に不自然に育って来た私は」、「こんな人間の私に対してもと」、劣等感を覚え、人の親切を素直に受け入れることすらできなかった。踊子は芸者風の髪型と服装のため、十七八の娘盛りに見えていたので、「私」は、「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか」という甚だしい軽蔑を含んだ婆さんの言葉に煽り立てられて、暖か

く礼儀正しい踊子に慕情を抱いていながら、ある「空想」を持っていた。この「空想」とは、「踊子を今夜は私の部屋に泊らせる」と思ったことである。そこで、夜の座敷に出た踊子は汚れるのであろうかと、不安でならなかった。「太鼓が止むとたまらなかった。」今夜の静けさほど煩わしいものはなかった。この場面は、作品の中で「私」が精神的に最も苦しんでいる時だった。

悩ましい一夜が明けた。起きたばかりの「私」は湯に行った。湯殿から川向うの共同湯の方を見ると、手拭もない、真裸のままの踊子は、両手を一ぱいに伸して何か叫んでいる。「私」を見つけると、また真裸のまま日の光の中に飛び出し、爪先きで背一ぱいに伸び上っていた。白い裸身と無邪気な様子を見た「私」は、踊子は子供なんだ、清纯そのものなんだと感動して、昨夜の悩ましさは一気に拭い取られた。「頭が拭われたように澄んで来た。」「私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐いてから、ことこと笑った。」(テキストP. 19) 踊子の素直さと若々しい生命に救済された「私」の心の底から発する笑い声であったろう。湯ヶ野出立の約束だった朝、「私」は共同湯の横で買った烏打帽をかぶり、高等学校の制帽をカバンの奥に押し込んでしまった。これは、思い切って「孤児根性」の束縛を取り除こうとする「私」の決断なのである。

「共同湯のシーン」を「『暗』の世界が『明』の世界に転じた所」⁽⁶⁾を位置づけるならば、踊子の口からもれた「いい人」という言葉は、「私」を人間として開眼させた言霊なのだと言ってよいのであろう。

赤坊の四十九日が近づき、明日は下田、というこの時、「私」はすでに栄吉の身の上話を通じて、旅芸人一行の名前を知っていたし、娘達に齒並びがわるいなんかと言われても、平気なほど、彼等と親しくなっていた。そして旅芸人の「野の匂いを失わない」のんきな旅心がわかり、御飯を出すのは勿体ないと思われた者も、「それぞれ肉親らしい愛情で繋り合っている」幸せな人間なのだと感じられた。こんな時、「いい人ね」「それはそう、

いい人らしい」「ほんとにいい人ね。いい人はいいね」と、単純で明けっ放しな響きを持っていたこの一言は、「私の心にぼたりと清々しく落ちかかった」。人に素直に好意を持ち、人の好意も素直に受け入れるようになった。さらに自ら自分をいい人だと素直に感じるようになった。世間尋常の意味でいい人だと言われたことによって「私」——川端康成は、二十年間も精神を苦痛させた「孤児根性、被恩患者根性、自己嫌厭、自己憐憫」などの醜いところを、きれいに洗い取られてしまった。「平俗な意味での、いい人」といふ言葉が、私には明りであった。」「いい人」と言われたのは「言いようなく有難いのだった。」下田の夜の町を眺めていた「私」は、暖かい人懐かしさに浸り、「わけもなく涙がぼたぼた落ちた。」「私」の心は清純な踊子に浄化され、「私」の魂は情熱にあふれた踊子に救済された。

第3章『伊豆の踊子』の醜たるものについて

清純で抒情詩のような『伊豆の踊子』にも「微かな汚れ」がある。これは長谷川泉氏の見解で、ほぼ定説化したものとなっている。そして、この問題に触れる時、「汚い考」という言い方はよく使われている。「汚い考」は川端の「ちよ」という作品に出てくる言葉である。周知のように、「1章」の婆さんの言葉に触発されて生まれた「それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ」という「私」の「空想」と、「2章」の「私」が悩む場面は、明らかに美しい『伊豆の踊子』の問題点として最も注目されており、この二つの場面をめぐる論争も極めて激しいのである。私が見るところでは、この二つの場面は、内容も表現も作品全体の清純なイメージに合わない。そういうわけでもあるか、『伊豆の踊子』を高校の教材として扱う時、例の場面は多くの出版社に削減された。私の大学で使われた教材では、作品は一字も削減されずにそのまま学生に提供されたが、しかし、教育現場という特殊な場合では、「青春の書」と呼ばれた『伊豆の踊子』における「私」の「汚い考」への正しい認識と適切な解釈は極めて重要で、作品味読にも

影響を及ぼしている。

「1章」に描かれた「私」の「空想」について、長谷川氏は川端の初期の作品を『伊豆の踊子』に重ね合わせて、両者を比較研究したうえで、次の結論を下した。

この部分（「1章」に描かれた「私」の「空想」を指す——筆者）は、さきに述べたように、「ちよ」のなかで「はじめて見た時の汚い考」と書かれているものに応ずるものである。清純さで洗われたような「伊豆の踊子」のなかの汚濁の部分である。そして、「伊豆の踊子」のなかには、汚濁の部分は、この一箇所しかない。⁽⁷⁾

これと対立した意見を出したのは森本穫氏である。森本氏は「そこにはみずからの醜を切り捨て、全体を純一な物語にしようとの作者の強い意志がはたらいている。主人公の踊子によせる感情はこの面からも汚れを含まぬものでなければなら」⁽⁸⁾なかったと、「私」における「汚い考」の捨象を指摘した。外国の一読者としては、作品の「醜たるもの」に関する従来の解釈に対していくつかの疑問、そして、まだ未熟なものに過ぎない意見を持っているので、それを述べて、ご批判を乞いたい。

1

主人公の「私」は峠の北口の茶店で婆さんに会った。そして婆さんの言葉に煽り立てられて、踊子に「汚い考」を抱いたと、長谷川氏は考えている。「私」は「1章」では、「お爺さん、お大事になさいよ、寒くなりますからね」と、労りの言葉を心の中で何回も言った、無口で暖かい青年である。踊子一行との対関係においても、「私」は、「孤児根性」による息苦しい憂鬱に堪え切れないで伊豆の旅に出た一人の青年であり、「あんな者」と呼ばれた踊子一行といくらか共通した精神を持っていた。この同類意識は

踊子一行との交流が深まるにつれますます強くなり、そのかぎり、次第に踊子への同情、そして慕情へと変わっていた。こんな「私」は、婆さんの言葉に煽り立てられたばかりに踊子を性欲の対象に思うようになった。——「私」に起きたこのような気持ちの急激な変化はどうも不自然でおかしいのである。それでは、「私」の「空想」はいったい何なのだろうか。これが問われねばならない。「踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ」を婆さんの言葉に対する「私」の内心の激しい反発と考えたらどうだろうか。この反発は、同類意識と、「私」の持つ一種の正義感による本能的な行動と考えられるのだろう。しかし、こういった解釈だけでは、踊子に対する「私」の気持ちが汚いか、それとも純粋なのか、まだ説明ができない。

2

「踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ」という「私」の「空想」について、鶴田欣也氏は、『伊豆の踊子』という論文で、次のように述べている。

一寸、不思議に思われるのは、あれだけ意気込んでいた期待が子供だと分り、外れてしまったのだから、そこに、なにかある種の失望感が表現されなければならないのに、それが全くなく、むしろ、その反対の純粋な喜びだけがあるということである。したがって「彼女を自分の部屋に泊らせる」を性欲とは結び付けずに、彼女の純潔を自分が保護するという解釈に立てば、失望感がないのは当然であって、この発見シーンを主人公の転換として見ずに、むしろ、予期しなかった願望成就として見ることもできる。

また森本穫氏は「『伊豆の踊子』小論—「空想」の解釈をめぐって—」で、次のように述べている。

もし、踊子が婆さんの言うような存在——客の意志によって自由にされるような哀れな存在であるならば、今夜は何としても自分の部屋に泊らせる、そして踊子の今夜を汚れから守ってやるのだ。自分はそうして踊子との美しい感情の交流を深めるのだ。

鶴田氏も森本氏も同様に、踊子に対して「私」の感情には不純なものがいささかもないと考えている。ただ、比較してみると、鶴田氏の方は意見の述べ方が婉曲なのに対して、森本氏の方はもっと直截で、はっきりしている。私は、鶴田氏が作品を読んで感じた事を率直に素直に発表しているのは、とても好ましいことだと感じた。

しかし、私は両者の解釈を完全に認めることができない。なぜなのだろうか。——私は『伊豆の踊子』にやはり「微かな汚れ」があると思っているからである。というのは、川端の原体験と、彼が作り上げた「私」という人間像を、「踊子の今夜を汚れから守ってやる」という勇ましい行動に結び付けるのは、とても無理だからなのである。「私」は思い遣りのある一人の青年である一方、「3章」の終わりに描かれているように、時々好戦的な気持ちになる二十歳の「男」でもある。しかも、現実の川端は、4歳、8歳、11歳の時、相次いで母、祖母、姉を失ったので、母親の愛を十分に享受せずに、女気のない家庭で育って来たのである。そういう環境で大きくなった川端は、女性に対する好奇心が人並み以上に強かったと考えられてよからう。そればかりではない。川端はまた別の一面を持っていた。このことについて藤森重紀氏は、「『伊豆の踊子』の構造—回想物語の中の実在人物—」（前掲）で、「たまたま川端康成は孤児であったかもしれないし、いささか体質的には好色的な性向があったかもしれない。」と述べている。中村光夫氏は、『伊豆の踊子』に既に明瞭にあらわれている川端文学の主要な性向として、孤児の感情、作品では幼いフェミニズムとしてあらわれている好色性、女性に対する好奇心等を挙げている。もう一つ大事なこと—

—踊子一行の社会的地位を忘れてはならない。踊子の素直さ、暖かさ、礼儀正しさは、強く「私」を惹き付けていた。だが、にもかかわらず、旅芸人はあくまで旅芸人であり、恋愛の対象ではない。

以上の分析を踏まえて考えると、婆さんの言葉に触発された「私」の心に、何かある「汚い考」あるいは「よからぬ考え」が芽生えたとしても無理からぬことであつたかも知れないか。

以上述べてきたのを纏めてみると、私は長谷川泉氏の解釈に異議を持たない。ただ、もし「私」の抱く「汚い考」の中味を「踊子を性の対象にした」もの、あるいは「邪悪なもの」等と捕らえるならば、私はこれを承知し難いのである。私の見るところでは、『伊豆の踊子』の中に汚濁の部分があるか否か、これはもちろん重要である。それよりもっと重要なのは、「汚」の度合いが問われるべきことである。作品主題と作品性質に關与する部分に触れる時、私たちは、慎重な態度をとるべきだと思う。

第4章『伊豆の踊子』の非現実性について

初めての伊豆の旅は、美しい踊子が慧星で修善寺から下田までの風物がその尾のやうに、私の記憶に光り流れてゐる。

『少年』（前掲）の7に記されたこの一文は、明らかに踊子と南伊豆に対する美化にほかならなかつた。読者は、「私の記憶に光り流れてゐる」慧星のように美しい踊子と、その尾のような南伊豆に導かれて、川端流の作風の基本構造と言われた、抽象された美と夢の世界に入つて来た。そのためか、長谷川泉氏は「『伊豆の踊子』が、すなおな体験にもとづく作品ではあつても、美化されたものである。」と指摘し、鶴田欣也氏は「この物語に出てくる空間は旅の空間であるので、非現実性を帯び、流れている。」と指摘した。私も作品を読みながら、踊子も物語の舞台としての南伊豆も、どう

も「現実性」と「非現実性」の間を揺れ動いているような気がしてならなかった。その「『現実性』と『非現実性』の間を揺れ動く」描写は、踊子と南伊豆の持つ両面性、つまり伊豆の旅へのありのままの描写と伊豆の旅への美化なのではなかろうか。事実、大正7年の秋、伊豆の旅をしてから、大正11年の『湯ヶ島での思ひ出』執筆を経て、大正15年の『伊豆の踊子』発表に至るまでの間に、川端康成は彼の人生と作風にまで影響が及んだ恋愛事件を経験し、生理的にも精神的にも生長した。だから、『湯ヶ島での思ひ出』と、そこから分離独立した『伊豆の踊子』は、きっと彼の原体験以上の事を物語っているに違いない。これはいわゆる作品の「非現実性」だと思う。従来の論文の中では、『伊豆の踊子』の「非現実性」は、それぞれ「模型の世界」、「観念の世界」、「虚構意識」等と定義され、川端の生い立ちと、彼の中学時代の「日記」への発掘調査に基づいて研究されて来ている。私には川端のことを細かく深く調べる条件が備わっていないから、本論では、『伊豆の踊子』の「非現実性」について感じたことを、未熟ながら率直に述べさせていただく。

1. 「伊豆の踊子」は姿を変えた伊藤初代か

「伊豆の踊子」は、伊豆の旅で出会った踊子そのままなのか、それとも姿を変えた伊藤初代なのか、それともそのどちらでもない、抽象化されたもう一人の人物なのか、この問題について、まず研究者の研究成果を挙げておこう。

ア. 長谷川泉「『伊豆の踊子』の創作動機」(前掲)

「伊豆の踊子」の踊子に伊藤初代の像を重ねて見る考え方には賛しえない。二人は、対極をなすメカニズムに生きる人物像である。

イ. 川嶋至『第三章 青春の傷あと―「みち子もの」と「伊豆の踊子」

一』

川端氏にとって「伊豆の踊子」は、古風な髪を結び、旅芸人姿に身をやつした、みち子にほかならなかったであろう。

ウ、小林一郎「『伊豆の踊子』論——一つの文体論的考察——」（川端康成研究叢書1「傷魂の青春『十六歳の日記』『伊豆の踊子』」，川端文学研究会編，教育出版センター，昭和51年8月）

霊界の父母とちよへの思慕の延長にある「踊子」の姿は「旅芸人という種類の人間であることを忘れてしまう」のであり、「肉親らしい愛情で繋り合っている」中に溶け込もうと「私」をさせるのである。

エ、平山三男「『伊豆の踊子』——読者のリアリティから——」

「伊豆の踊子」は清野や初代の事ではなく、その地名を聞いただけで半島の持つ半独立性、その背骨をなす山々、海、そして明るさの響きのある「伊豆」での可憐な「踊子」との“めぐりあい”が作品の中心となっているのである。

オ、川嶋至氏の仮説について、川端自らの意見がある。

「伊豆の踊子」の面影に「みち子」の面影を重ねることなど、まったく作者の意識にはなかった。踊子と「みち子」とのちがひは、まだ二十代の私の記憶で明らかだったし、踊子を書く時に「みち子」は私に浮んで来なかった。⁽⁹⁾

ここで、その次に来る文章、「しかし、『伊豆の踊子』の草稿である『湯ヶ島での思ひ出』を書いた、大正十一年、二十三歳の私は、恋愛（ではないやうな婚約）の『破局』の『直後』だから、相手の娘は強く心にあった。」

に注目したい。

踊子は何と言っても「私」——川端康成に清純な愛と正直な好意を寄せた、有難くも暖かい存在である。そんな踊子に対して、強く心にあった初代は巨大な傷心をもたらした痛ましい存在である。「踊子を書く時に『みち子』は私に浮んで来なかった」と川端は自ら書いていても、彼は踊子を書く時、自分から遠ざかってゆく初代へのひたむきな愛と、初代の裏切りによる傷手からの回復を希求していたに違いない。さらにもう一つの事に注目しなければならない。「伊豆の踊子」はヒロインの素質を例えば、可愛さ、暖かさ、素直さ、清純さ、礼儀正しさ等、すべて持っている、完璧に近い少女である。これはまったく偶然のことではあろうか。私は川端康成における「伊豆の踊子」の存在について、小林一郎氏に最も近い考えを持っている。つまり、「伊豆の踊子」は、伊豆旅行の道連れになった踊子でもない。「旅芸人姿に身をやつした」初代でもない。川端が初代に求めて遂に得られなかった夢と、母の愛に漬かりたいという夢にも似た希望——この二つを心に抱いて、風光明媚な伊豆半島に登場させられ、そして彼の心の傷痕を癒し、これから新たに生きるために魂を清めてきた女神だったのである。

汽船が下田の海を出て伊豆半島の南端がうしろに消えて行くまで、私は欄干に凭れて沖の大島を一心に眺めていた。踊子に別れたのは遠い昔であるような気持だった。(テキストP. 39)

つい先まで「私」が一生懸命に話しかけた踊子は、東京に戻る船中では、もはや「私」の一つの記憶になってしまっていた。そういう設定は、踊子はすでに与えられた使命を成し遂げ、「私」と踊子との関係をこれからも維持させる必要はないのだという作者の強い意志を示していると考えられる。そして、「踊子に別れたのは遠い昔であるような気持」とは、まさに突然夢から覚めてしまい、再び現実に戻った時に生じた気持ではなかろうか。「伊

豆の踊子」は、実際に伊豆の旅で出会った踊子をモデルにして、川端康成にはなかなか手の届かない夢と希望を叶えるために誕生した想像上の人物なのであろう。

2、「伊豆半島」は虚構の舞台か

伊豆半島を「虚構」の二文字に結び付けるのは、普通の場合では不可能なのである。ここで、こういった前後矛盾したタイトルをつけたのは、「私」と踊子の旅先となった「伊豆半島」、正確に言うと、「南伊豆」は、川端の脳裏においては、あの関東地方の南西に位置した伊豆半島なのか否かを解明したいからである。

『伊豆の踊子』に描かれた「南伊豆」は、川端が踊子に、与えられた使命を果たさせるために設計した旅先と考えてよいわけである。この仮説を裏付けるために気付いた所を三つ挙げる。

(1)

暗いトンネルに入ると、冷たい雫がぼたぼた落ちていた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。(テキストP. 12)

この文を読むと、『雪国』の書き出しの名文が思い出される。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。

(『雪国』P. 5, 新潮文庫, 昭和22年7月)

トンネルをぬけると別世界の雪国になっている。ここで、トンネルは、現実の世界から非現実の世界への通路のような働きを持つのである。『伊豆の踊子』でも同様ではないか。さらに「南伊豆への出口」という表現は現実と非現実の境目となるトンネルの位置を一際明確にさせている。林武志

氏は『伊豆の踊子』成立史考』（『日本文学研究』、昭和47年2月）で、「2章」以後を非現実の世界と定位した。こういった発想は川端文学におけるトンネルの効果につながっているのだと思う。

(2)

「2章」以後に登場した旅芸人のうち、男の名前は栄吉、その妻の名前は千代子である。因みに栄吉は川端康成の死んだ父の名で、千代子は彼との婚約を破ったあの娘の名で、つまり初代のことである。「南伊豆」を生きた人間には、川端の肉親と恋人が影を落している。こんなわけで『伊豆の踊子』の舞台としての「南伊豆」の現実性が疑われるのは当然であろう。

(3)

「6章」では、「私」は学校を楯に取って東京に帰らなければならないと言い出した。これはエリートの「私」には必然の帰結である。というのも、「伊豆半島」はあくまで虚構の世界であり、「孤児根性」からの脱却を実現した「私」は、現実世界に戻り、新しい生活を始めなければならなかったからである。

おわりに

本論では、『伊豆の踊子』を正しく理解するのに最も重要なところ、そして、この作品に対する疑問点についていくつか考えて来た。私は学が浅く、調査研究も不十分であるから、いままで述べてきたところには、筋の通らない、客観性に欠けたものが、きっと数多く見られるに相違ない。だが、今度の論文作成を通じて私が得たものは、間違いなく将来の私の日本近代文学の研究と教育活動につながっていくと思う。日本語教育に携わるものとしては、これを機会に、一人川端文学だけでなく、日本文学を幅広く知るべきだと思うし、中国の大学生の注目を浴びた日本近代文学の傑作には、

他に森鷗外の『舞姫』とか、夏目漱石の『坊っちゃん』・『吾輩は猫である』、さらに三島由紀夫の『金閣寺』、井上靖の『敦煌』など、数多くあるから、いままでの経験と教訓を生かしてさらなる研究を続けたいと考えている。

＜テキスト＞

川端康成『伊豆の踊子』，新潮文庫，昭和25年8月。

〔注〕

- (1) 『川端康成全集』第1次全集第2巻後記に記されている。
- (2) これらは、長谷川泉氏，藤森重紀氏，武田勝彦氏の論文に対する研究によって，筆者が纏めたものである。
- (3) 『川端康成全集』第2巻の「あとがき」に記された一文である。
- (4) 川端康成『少年』（『人間』5——昭和24年3月号，断続連載）の7に記された一文である。
- (5) 川端康成『少年』の14に記された一文である。
- (6) 小林一郎「『伊豆の踊子』論——一つの文体論的考察——」（川端康成研究叢書1「傷魂の青春『十六歳の日記』『伊豆の踊子』」，川端文学研究会編，教育出版センター，昭和51年8月）。
- (7) 長谷川泉「川端康成論考」（明治書院，昭和40年6月）。
- (8) 森本穫「『伊豆の踊子』小論——「空想」の解釈をめぐって——」（「孤児漂白——川端康成の世界——」，林道舎出版，1990年4月）。
- (9) 川端康成『一草一花』，昭和43年。

【参考文献】

1. 長谷川泉「川端康成論考」（明治書院，昭和40年6月）。
2. 川端康成研究叢書1「傷魂の青春『十六歳の日記』『伊豆の踊子』」（川端文学研究会編，教育出版センター，昭和51年8月）。
3. 川嶋至『第三章 青春の傷あと——「みち子もの」と「伊豆の踊子」——」（「川端康成の世界」，講談社，昭和44年10月）。
4. 森本穫「『伊豆の踊子』小論——「空想」の解釈をめぐって——」（「孤児漂白——川端康成の世界——」，林道舎出版，1990年4月）。
5. 森本穫「『伊豆の踊子』追考——ふたたび「空想」の解釈をめぐって——」（同【参考文献】4）。
6. 鶴田欣也『伊豆の踊子』（「川端康成の芸術——純粹と救済——」，明治書院，昭和

56年12月).

7. 平山三男「『伊豆の踊子』—読者のリアリティから—」(「川端康成—現代の美意識—」, 武田勝彦／高橋新太郎編, 明治書院, 1978年5月).
8. 岩田光子「伊豆の踊子」(「川端文学の諸相—近代の幽艶—」, 桜楓社, 1983年10月).
9. 近藤裕子「『伊豆の踊子』論(下)—虚構意識の構造—」, 国文学年次別論文集, 近代, 昭和55(1980)年, 3(学術文献普及会編集, 明文出版, 1982年7月).